

## 【活動報告】

### A. Rath との出会い

～明治初期来日外国人に関するレファレンスから～

東京都公文書館 史料編さん担当

佐藤 佳子

#### 1 始まりは一枚のハガキから

2017年3月、東京都公文書館に一本の電話が入った。「崩し字で書かれた古いハガキに何が書いてあるか読んでほしい」との依頼であった。当館では古文書解読サービスは行っていない旨を説明したところ、「ドイツの友人から書かれている内容を教えてほしいと依頼され、一時的に帰国している間に何とか解読したいと努力したが、どうしても解読できず困っている」とのことだった。ハガキ1枚だけとのことだったので、特別にレファレンスサービスとして引き受けることとし、後日ハガキのコピー（図1）が送付されてきた。

ハガキは、大野徳三郎から牛込岩戸町（現新宿区岩戸町）の成田農助に宛てたもので、何らかの品の注文書であることは判明したが、品物が略称で書かれているようで、どんな品なのかはわからなかった。また、ハガキの形式や郵送料から、明治6年（1873）から同15年（1882）の間に投函されたものであることもわかったので、以上について回答した。

後日、ハガキの所蔵者であるドイツの方から丁寧な礼状を頂戴した。その後、礼状に記載されたメールアドレスに返信をしたことをきっかけに、A. Rath にまつわる長い物語が始まったのである。

#### 2 イングリッド・クラインバッハ (Ingrid Kleinbach) さんのお話し

ハガキの所蔵者イングリッドさんは、ドイツ南部シュツットガルト郊外バーリンゲンに居住されている女性。幼い頃、隣家に上品な老婦人ガートルード・ラース (Gertrud Rath 図2) がメイドとともに静かに暮らしていた。婦人は、第二次世界大戦中にシュツットガルトから空襲を避けて郊外のバーリンゲン

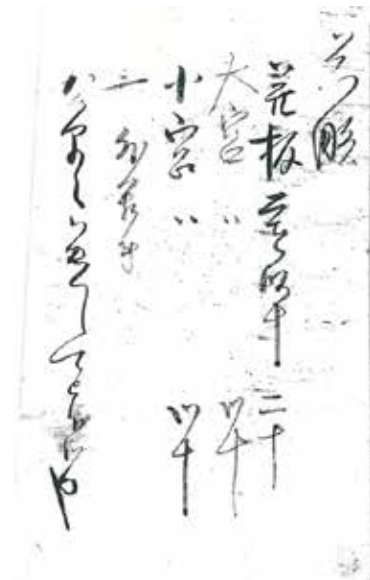


図1 成田農助宛ハガキ

(Balingen) に移り、そのまま居を定めたようで、田舎の人には見えない品の良さがあつた。婦人には身寄りがなく、亡くなった後、イングリッドさんは藤のスーツケースに入った遺品を贈与された。その中には、解読依頼が寄せられたハガキの他に、漆塗りの箱（図3）、婦人とメイドの写真、一族の男性と思われる肖像スケッチ（図4）、婦人が父親から受け取った絵ハガキ（図5）などが入っていた。

イングリッドさんは、どうしてこんな異国の地に、ハガキや漆塗りの箱など日本の品が入っているのか、長年不思議に思っていた。たまたま知り合いを通じて現地在住の日本人に出会い、ハガキの内容を調べてほしいと依頼したのだという。



図2 Gertrud Rath 肖像写真



図3 漆塗りの箱



図5 父親からのハガキ



図4 Herr Rath 肖像

### 3 府下居住外国人明細表

イングリッドさんの説明を受け、念のために東京都公文書館情報検索システムで「ラース」という名前を手掛かりに明治期の公文書を検索したところ、明治初期の東京府文書の中に「アドルフ・ラース」なる人物を発見した。明治10-11年(1877-78)外務掛作成「府下居住外国人明細表」<sup>1</sup>(図6)で、東京府下に居住する外国人について居住期間と給料額、出身国、職業、姓名、住所を記載した一覧表である。当時、東京における外国人の居住は、原則として築地の外国人居留地に限られており、居留地外に居住する場合には許可や届け出が必要であったことから、こうした文書が作成された。

文書の記載(図6 矢印部分)によると、アドルフ・ラースは、三菱会社<sup>2</sup>に雇用され、明



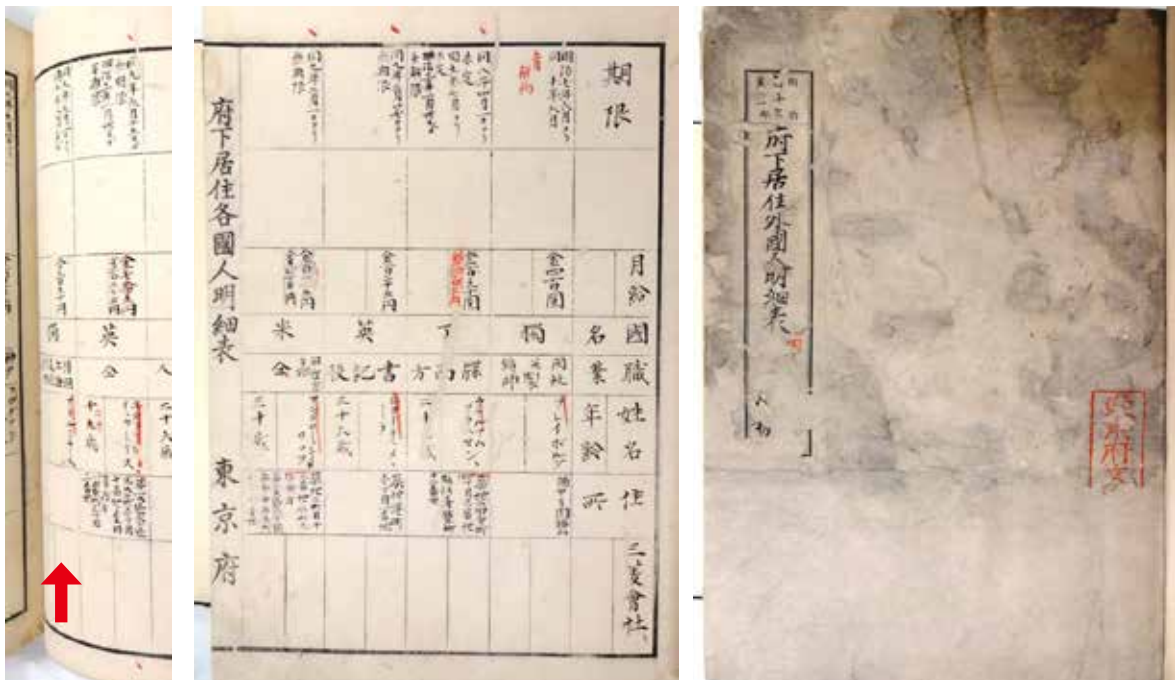


図6 府下居住外国人明細表

治9年（1876）9月1日から翌10年8月31日までの一年間居住、月給350円、独＝ドイツ出身、三菱会社の清国上海支社代理人、居住地は空欄となっている。残念ながら、名前がカタカナで表記されているため、正確な名前のつづりは判明しなかった。

そこで、アドルフ・ラーズというドイツ人が、明治9年から10年にかけて東京に滞在していたとみられる記録があることをイングリッドさんに知らせたところ、すぐに返信があり、ガートルードの遺品の中に「A. R.」のイニシャルを刺繍したリネンバッグ（図7）が残っているという情報が新たに寄せられた。



図7 リネンバッグ

#### 4 ラースか？ ライスか？

偶然に驚きつつも、名前のつづりを確認する手段はないかと、ラーズを雇用した三菱会社に関する資料を所蔵する三菱史料館<sup>3</sup>で調査を行った。事前にレファレンスを依頼しておいたところ、名前が記載されている掲載資料を3点調査することができた。

1点目は、明治9年8月17日付で外務省が三菱会社に交付した外国人雇入免状<sup>4</sup>（図8）である。「府下居住外国人明細表」にある通り、上海支社代理人として一か月350円という高給で、明治9年9月1日から一年間の「日耳曼人」（＝ゲルマン人）アドルフ・ライスの雇入が許可されている。

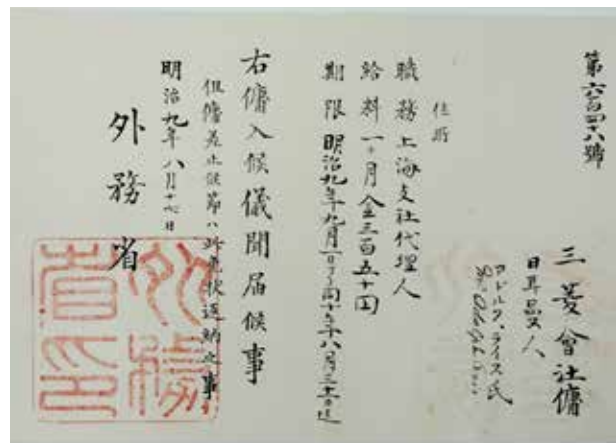


図8 アドルフ、ライス雇入免状

しかし、名前のつづりはRathではなく、「Mr. Adolph Reis」であった。明治初めの日本人にとって、手書きのサインを正確に読むことは難しかったと思われるので、つづりを読み

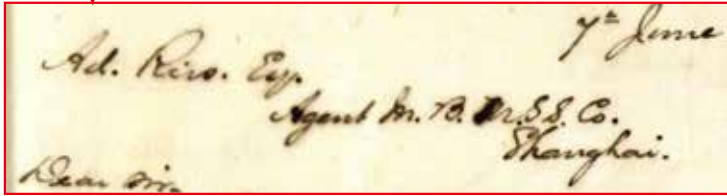
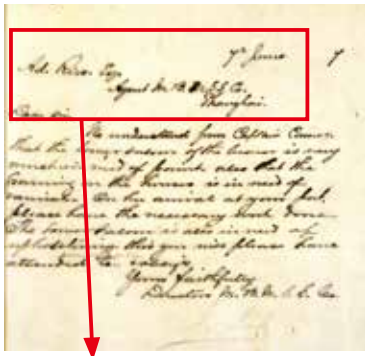


図9 Ad. Reis 宛書簡控

間違えている可能性も否定できないが、少なくとも外務省が発行した正式な書類に記載された名前が「Adolph Reis」であることは確認できた。

2点目は、明治10-11年、三菱の外国人幹部クレブス(Krebs)<sup>5</sup>が上海に向けて発信した英文書簡の控である<sup>6</sup>(図9)。拡大画像を見ると、「Ad. Reis」というつづりが確認できる。

3点目は、明治15年(1882)「秘密文書謄写」に綴られている1月20日付英文書簡の写しである(図10)<sup>7</sup>。これにもはっきりと「My dear Mr. Reis」と記載されている。

雇用当初に発給された書類はともかく、着任後、日常的に発信する書簡にまで、誤ったつづりで名前を

記載し続けるということは通常考えられないだろう。

以上の調査から、三菱会社の上海支社代理人として明治9年に雇用されたのは、「Adolph Reis」=アドルフ・ライスであり、東京府文書中に記載されたカタカナ表記が誤りであったものと思われる。



図10 Ad. Reis 宛書簡写

## 5 上海支社代理人アドルフ・ライス

周知の通り三菱は、明治初年海運業によりその基礎を築いた<sup>8</sup>。

明治8年1月、日本国郵便蒸汽船会社との激しい競争の末、国内航路で勝利をおさめた三菱会社に、政府は初の邦人会社による国際航路として上海航路の開設を命じる。これを受けて同社は、同年2月3日に第一船を横浜から出港、11日に上海に入港させた。同月4日には上海のフランス租界に支店を開設し、1月21日に雇い入れたアメリカ人コールニングを上海支店廻漕事務として派遣している<sup>9</sup>。横浜-上海間に定期航路を開設していたパシフィック・メール社(以下「P.M.社」という。)との競争にも打ち勝って、8年10月にはP.M.社から上海航路を一括買収するに至る。

P.M.社の撤退をみて、翌9年2月、新たに航路参入を図ってきたP&O汽船会社<sup>10</sup>との競争にも勝利して、同年8月ついに三菱会社が日本-上海間の航路を独占するに至る。翌9月1日から雇用されたアドルフ・ライス<sup>11</sup>は、同社が上海航路事業を発展させていこうとする重要なタイミングで代理人として雇用された、切り札的な人物だったのではないか。前任のコールニングが月給250円だったのに対し、ライスは350円という高給で雇われたことにもその期待が表れている。

## 6 ドイツでの調査

一方、明治前期の日本のハガキや日本製と思われる漆の小箱を子孫に伝えたA. Rathについて、イングリッドさんと友人の手により調査が続けられた。

遺品を再度調べたところ、図4の肖像はガートルードの父親であることが判明した。また、

その他のハガキに書かれた住所から、ラース家のシュツットガルトでの住所が判明し、シュツットガルト公文書館所蔵の住民登録簿で確認したところ、そこに Albert Rath の名前を発見したのである。

## 7 ドイツと日本、140年の時を越えて

何げない日常のレファレンス対応から始まった今回の調査は、思いがけずヨーロッパと東アジア、南ドイツと日本・東京を結び、2017年から1870年代へと140年の時を遡るものとなった。

以上の調査経過をみて、インターネットの普及とネット環境の向上により、資料画像を簡単に送信できることから、遠い異国の資料であっても、きめ細かいレファレンス対応が可能であることをご理解いただけるだろう。

依然として、Rath 家に伝わった日本由来の品が、どのような経緯でもたらされたのかは判明しないが、イングリッドさんは、さらに調査を進める予定と聞いている。

日本においても、横浜入港船舶の乗船者情報など調査可能な資料が残っていると思われる。それらの調査結果については、また改めてご紹介したい。

本稿を執筆するにあたり、イングリッドさんより資料画像を提供いただいたほか、各位より多大なご協力をいただいた。ご氏名・機関名を記して感謝を申し上げます。

Ingrid Kleinbach, Fumiko Shibuki, Holger Mack, Edeltraud Fischer, 三菱史料館、坪根明子、岩瀬美弥子（順不同 敬称略）

- 1 【東京府文書】「府下居住外国人明細表・甲」（外務掛 明治10-11年 1877-1888）請求番号604. D3. 10-02 東京都公文書館所蔵
- 2 当時の正式呼称は郵便汽船三菱会社。同社は明治3年（1870）大阪で九十九商会として発足、同5年に三川商会、翌6年に三菱商会と改称。7年には東京へ本拠を移転して三菱蒸汽船会社と称する。8年に半官半民の日本国郵便蒸汽船会社を吸収・併合して郵便汽船三菱会社と改称。本稿では資料の記載に合わせ、「三菱会社」の呼称を使用した。
- 3 三菱経済研究所の附属施設として同研究所に併設。明治3年（1870）の三菱創業から昭和20年代の三菱本社解体、新しい三菱グループの発足にいたるまでの経営史料・業務文書等を中心に、三菱関連の史料を幅広く収集・保管。所蔵史料数約7万2千点（平成29年9月末現在）。（三菱史料館ホームページ <http://www.meri.or.jp/shiryo/mer300j.htm> 平成29年12月22日閲覧）
- 4 「諸官省上申書控 甲号 明治13年分 本社」（とじ戻し分）明治8年-13年 請求記号MA-00930-002 三菱史料館所蔵
- 5 デンマーク人フレデリック・クレプス。明治6年（1873）入社。鉱山技師で当初は炭坑の採掘指導にあたったが、のちに本社に呼ばれ石川七財、川田小一郎に次ぐ管事にまで上りつめた。（「岩崎弥之助物語」vol.05 事業の多角化と人材登用 三菱グループポータルサイト所収 <https://www.mitsubishi.com/j/history/series/yanosuke/yanosuke05.html> 平成29年12月22日閲覧）
- 6 「[Krebsより上海Boyd & Co.宛英文書簡控]」郵便汽船三菱会社 本社 Krebs 明治10-11年 請求記号MA-01299 三菱史料館所蔵
- 7 「秘密文書謄写 明治15年第1月 [長崎]支配人担当 郵便汽船三菱会社 長崎瓜生震 明治15年1月 請求記号MA-05694 三菱史料館所蔵
- 8 公益財団法人三菱経済研究所附属三菱史料館編『三菱のあゆみ』第5版 同研究所 平成28年、同史料館編『岩崎弥太郎小伝』第3版 同研究所 平成25年
- 9 三菱社誌刊行会編『三菱社誌』二 財団法人東京大学出版会 昭和54年
- 10 イギリスの海運会社ペニンシュラ・アンド・オリエンタル汽船Peninsular and Oriental Steam Navigation会社の略称。イギリス海運最古の伝統を有し、世界海運に指導的地位を占めてきた世界最大手の船会社。
- 11 同一人物であるかどうか不明だが、明治初年横浜で生糸の輸出を行っていたシュルツ・ライス商会（Shultze, Reis & Co.）の経営者としてAdolph Reisの名前が見える。（井川克彦『明治初期生糸輸出における「外国送り荷」取引』平成17年『日本女子大学紀要・文学部』54号 岩瀬美弥子氏教示による。）